

中学校での授業改善に向けた効果的な校内研修の在り方を探る

三重県教育委員会事務局 研修企画・支援課 企画・支援班 研修員 奥田 勝久

I はじめに

三重県の全国学力・学習状況調査の結果において、小学校では改善がみられるものの、中学校は依然として厳しい状況にあり、学力向上に向けた取組がますます重要視される。また、平成27年12月に出された中央教育審議会の答申では「教育の資質能力の育成・向上のためには、(中略)自発的、継続的に校内研修が実施されることが不可欠である」とあり、子どもたちの学力の向上に向けた、教職員一人ひとりの授業力の向上を図る教員の学び合いである校内研修の推進が重要であるとする。

そこで、教員の授業力の向上を図る校内研修の取組について調査・研究し、中学校での効果的な研修方を考察していく。

II 研究の目的と方法

1 研究の目的

教員の授業力の向上を図る校内研修の取組について課題を調査・研究し、中学校における効果的な校内研修の在り方を探る。

2 研究の方法

- (1) 授業研究担当者育成研修の重点推進校への事前・事後・フォローアンケートから中学校の校内研修の課題を明らかにする。
- (2) 平成28年授業研究担当者育成研修の集合研修を参観する。
- (3) 平成28年授業研究担当者育成研修の重点推進校への校内研修の取組を参観することと、他県の効果的な校内研修の取組内容を調査し、効果的な校内研修の取組方法についてまとめる。
- (4) (1)から(3)の調査から中学校での効果的な校内研修の在り方を探る。

III 研究の内容

1 平成28年度授業研究担当者育成研修における重点推進校の取組

3つの中学校での校内研修の成果と課題について、当研修の研修内容にあった5つのキーワード(焦点化、視覚化、自己教材化、共有化、多様化)の観点から取組状況を整理してみた。

<A中学校>

	筆者の記録より	焦点化	視覚化	自己教材化	共有化	多様化
成果	「ICT機器の活用」「話し合い活動」「その他」の3つの視点で話し合い活動を持つようにしていた。	○				○
	前回での全体研修会で「自分化」したことを再度授業者に示し、今回の授業でのチャレンジを意識できるようにしていた。			○		
	模造紙を囲んだことで、付箋の中身がよく分かり、話しやすさにつながった。		○		○	
	教科内研究授業の成果を研修だよりにまとめ、全体校内研修会で還流していた。		○		○	
課題	教科別事後検討会のみなので、各教科の学びをどのように、全体の学びにしていくかが課題である。				●	
	付箋を貼りながら話し合いをしていたので、事前に貼るなどして、時間を有効に使えるようにした方がいい。		●			

<B中学校>

	筆者の記録より	焦点化	視覚化	自己教材化	共有化	多様化
成果	黒板と事項書に分散会の話し合いの視点が明記されていた。		○		○	
	グループの司会者と発表者を事前に決めておくなど、スムーズに進行することができた。				○	
	グループの人数を4、5人にすることで、話す機会を多く持てるようにしていた。				○	
課題	話し合いの視点が曖昧なため、話し合いが広がっていた。もう少し具体的にしたい方がいい。	●				
	全体共有の発言の中で、話し合いの視点から少しずれている発言内容がみられた。	●				
	グループ討議で公開授業を見られなかった人もいたので、十分に討議を深めることができなかった。				●	

(様式4)

<C中学校>

	筆者の記録より	焦点化	視覚化	自己教材化	共有化	多様化
成果	道徳の授業であったため、教科の枠を越えて活発に話し合いをすることができた。				○	
	グループでの話し合い内容がポイントとして、まとめられているとともに、全体共有の場でわかりやすく示されていた。	○			○	
	グループ発表では、すべての班が成果と課題だけでなく、改善策まで話し合い提案することができた。			○		
課題	教科研修での全体研修は、年1回しかなく教科毎に行われる研修の全体への深まりに課題である。				●	
	グループ発表の内容が重なるところについては省略するなど、校内研修の取組に工夫の必要がある	●				

2 調査研究から見えてきたこと

中学校における効果的な校内研修の在り方について、5つのキーワードもとに以下のとおりまとめた。

(1) 焦点化

- 研究テーマに沿った授業づくりについて、焦点を絞って授業を参観し協議をすすめる。また、その際子どもの姿から学び合うようにする。

(2) 視覚化

- ホワイトボードや模造紙等を活用して、話し合いを見える化し、協議内容を整理したり、構造化したりすることで協議や学びを深める。
- 課題の共有が十分にできにくい時には、研究通信に掲載するなどして視覚化を図る。

(3) 自己教材化

- 研修会で作成した成果物や研究通信等を活用し、1回1回の校内研修会を繋ぐとともに、研修での学びが一人ひとりの授業改善に繋がるように工夫する。

(4) 共有化

- どの教科を担当する教員であっても、主体的に研究協議に取り組めるような研究テーマを設定し、それに沿った授業づくりについて研究をすすめる。(例としてアクティブ・ラーニング、ICT機器の活用、質の高いめあてと振り返り等)
- 取組意識に差がみられる時には、研究テーマや学校の課題等に立ち返り、校内研修で共有を図る。

(5) 多様化

- 研修時間が取れない時は、学年部会・教科部会など、様々な少人数のグループで研修する。
- 各教科特有の授業づくりや専門性が発揮され、その良さが他の教科を担当する者にも取り入れられていくような機会をつくる。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 校内研修について、研修内容にあった5つのキーワードで見ること、中学校の校内研修の取組状況を判断することができた。5つのキーワードは各校の取組の強み、弱みを客観的に判断する材料の1つになると考えられる。
- (2) 3つの中学校の授業研究を伴う校内研修では、焦点化、視覚化、自己教材化、共有化は取り入れられていたが、多様化について取り入れていく必要がある。

2 課題

- (1) 中学校の校内研修の課題の改善策を提案することを目的に研究してきたが、今年度は考察までしか至らなかった。効果的な校内研修の方法について、さらに研究をすすめる必要がある。
- (2) 例えば多様化について、改善策を明らかにするなど中学校の校内研修の具体策をさらに考察していく必要がある。